

## シンポジウム『生命の哲学—その歴史と課題』

横山 輝雄

生命をめぐる問いは、古くから哲学の重要な課題であった。アリストテレス、ライプニッツ、カント、ドイツ自然哲学、ベルクソン、ニーチェなど多くの例がある。哲学から科学が分化してきたこともあり、かつては哲学者が科学上の問題についても議論していた。デカルトの『哲学原理』の多くの部分は現在の科学にあたるものであり、カントの著作にも、最初期の活力についての論考や「カント・ラプラスの星雲説」など、そうしたものが少なくない。しかし 19 世紀後半以降「思弁的」自然哲学が、「実証的」科学との闘争の結果敗退し、自然・宇宙・世界などから哲学は退却した。20 世紀には哲学と科学の分離と相互不干渉がひろがり、生物学主義・心理学主義・社会学主義などの批判、事実問題と権利問題の区別、事実と価値の分離、世界について語るのではなく言語について語る、といったことによって哲学と科学の交渉はなくなった。

しかし、20 世紀の後半の「生命科学的転回」以降、分子生物学などの科学的生命探求が進み、1970 年には分子生物学者モノーの『偶然と必然』が出された。分子生物学は生命操作や医療技術などと結びつき、宇宙における「生命」の意味や「生きる」ことのあり方が問われるようになった。こうした状況のなかで科学研究をめぐる「倫理委員会」設置などの制度もでき、まず倫理問題で哲学と科学の交渉が再び行われるようになった。また地球環境問題なども大きな関心をもたれ、倫理問題だけでなく自然観、世界観の問題も問われるようになり、「自然哲学の復権」や、哲学における「宇宙論への回帰」が 20 世紀の末頃からいわれるようになってきた。地球環境のなかでの人類の「生き残り」が問題となり、社会においても競争を是とする自由主義的な風潮がひろがると、それが進化論への関心と結びつき、1975 年にウイilsonの『社会生物学』が出版されると大きな論争がおこった。ダーウィンをはじめとして 19 世紀後半に問題となった事柄が一世を経て再び問題になっている。進化論についてのローマ法王書簡も(1896 年ではなく) 1996 年にだされ、同じ頃アメリカの哲学者デネットの名著『ダーウィンの危険な思想』も刊行された。このような状況において、

以前は物理学や数学が中心であった科学哲学において「生物学の哲学」と呼ばれる分野が登場するとともに、現実の社会的問題との関連で「生命倫理」や「環境倫理」などの哲学の分野が形成された。「脳科学」の発達が提起する人間観、人間の「サイボーグ」化に伴う「神経倫理」（ニューロ・エシックス）や「ロボット倫理」の問題、さらに「風景哲学」「景観哲学」などもそれらと関連したものである。

1960年代から70年代にかけての日本では「公害問題」と呼ばれた深刻な環境破壊があった。にもかかわらず環境倫理や環境哲学が当時の日本でなぜ誕生しなかったのが現在問題とされている。日本において仏教も儒教も当初は外来思想であったが、ある時期に土着化し「日本化」した形態があらわれた。西洋哲学との接触も明治以降100年以上が経過し、ある程度土着化したのが、それが近年の「国際化」の動向のなかで変容しつつある。これまで日本では、広義の哲学は、「哲学」（西洋哲学）・「中国哲学」・「インド哲学」に大きく三区区分された（場合によってはそれに「日本思想史」が付加される）。この場合「哲学」とは即「西洋哲学」のことであり、例えば学会名称でも「日本哲学会」は、「日本哲学・会」ではなく「日本・哲学会」であり、内実は西洋哲学である。このことは、日本あるいは東アジア近代における「哲学」の受容と関連している（「中国哲学」などは日本の発明品である）。しかし近年の学問研究国際化のなかで、「哲学」が、固有の「西洋哲学研究」と、「J-フィロソフィー」あるいは「日本哲学」に分化しつつある（あるいは、これまでの「哲学」としての西洋哲学研究は同時にある種の「J-フィロソフィー」であったのかもしれない）。生命をめぐる哲学は、生命主義の伝統の強い日本における「J-フィロソフィー」の一つの重要な領域である。

生命についての「J-フィロソフィー」を展開するにあたって、西洋哲学に新たな解釈を加えることが重要であるが、その際目的論をめぐる議論が重要である。目的論を機能的説明や発見的原理ではなく、自然全体の目的の問題と関連づける必要がある。宇宙論における「人間原理」や「観測選択効果」「終末論法」などがそれとかわる。あるいは「生存競争の哲学」をめぐる、19世紀末にダーウィンの友人ハクスレーが『進化と倫理』をあらわし、自然淘汰と倫理の関係を問題にしたが、これは現代の問題でもある。また、「共生」の理念と

現代生物学は大きく乖離しており、トルストイの『生命について』（かつて『人生論』という題で訳されていた）における科学的生物学批判の現代的問題がある。他にも「生命倫理」と「環境倫理」の乖離など、さまざまな課題がある。

生命の問題は、日本でも西洋でも宗教と結びついており、例えば神学者ティヤール・ド・シャルダンの「圏域」の議論などを、ポパー、エックルス、ポラニーらの「創発」の議論や「目的論」と結びつけて検討することも必要であろう。アメリカで「ダーウィン・ウォーズ」といわれる進化論をめぐるドーキンス派とグールド派の論争が行われており、そうした背景のもとでローマ法王書簡も出されているが、日本ではそうした背景が十分に理解されていない。日本でも哲学的「自然主義」が議論されているが、唯物論、物理主義との関連を整理し、生命や倫理をめぐる議論とどうつながるかを明確する必要がある。

また、そこでの「物理主義」が、はたして本当に現在の先端の物理学に基づいているのかも検討する必要がある。物理主義の哲学的議論は、脳科学や分子生物学などで議論する限り一昔前の古典的な物理学モデルでよいとしても、宇宙論における「多世界説」などの最先端の物理学は、それとは違うのではないだろうか。脳科学や分子生物学などでは19世紀以前に回帰する型の議論が行われおり、科学と宗教の「闘争」的な状況にあるが、物理学では、20世紀における科学と宗教の「分離と相互不干渉」を越えて、21世紀的な科学と宗教の「対話と統合」がいわれている。これは哲学における「自然哲学の復権」や「宇宙論への回帰」に対応するものであり、生命をめぐる哲学的議論は、こちらの側から、現代生命科学に対して批判的なスタンスをとる必要がある。

(よこやま てるお／南山大学)